1 理性主義への反省

▶ pp.137～140

生命の躍動 ―ベルクソン

けれども視覚への歩みなどといえば，旧（ふる）い目的概念（がいねん）にもどっていることにはならないか。この歩みが到達目標の表象を意識されてか無意識にか必要としているならば，まったくその通りにちがいない。しかし事実は，視覚への歩みは生命の根源のはずみによっておこなわれ，この運動そのものに含まれているのであって，だからこそ進化の独立な諸線上におなじ歩みが認められもするのである。ではこの歩みはどうして，またどのようにそこに含まれるのであろうか。そう尋ねられたら私は答えて，生命は何であるよりもまずなまの物質にはたらきかける傾向なのだといおう。このはたらきかけの方向はもちろん前もってきまってはいない。そこから，生命は進化の途上に予想もつかぬ多様な形態をまきちらすことになる。

（ベルクソン，真方敬道訳『創造的進化』岩波文庫）

自我・エス・超自我 ―フロイト

しかし超自我は，エスの最初の対象選択の残滓（ざんし）にすぎないものではなく，これに対する強力な反動形成という意味をもつ。自我に対する超自我の関係は，「おまえは（父のように）あらねばならない」という勧告に尽きるものではなく，「おまえは（父のように）あってはならない」という禁止，すなわち，「父のすることすべてを行ってはならない」という禁止を含むものである。自我には多くのことが禁止されたままなのである。自我理想のこの〈二つの顔〉は，自我理想がエディプス・コンプレックスの抑圧を行うという事実から生まれるものである。

（フロイト，中山元訳『自我とエス』ちくま学芸文庫）

野生の思考 ―レヴィ－ストロース

私にとって「野生の思考」とは，野蛮人の思考でもなければ未開人類もしくは原始人類の思考でもない。効率を昂（たか）めるために栽培種化されたり家畜化された思考とは異なる，野生状態の思考である。……

野生の思考を規定するものは，人類がもはやその後は絶えて経験したことのないほど激しい象徴意欲であり，同時に，全面的に具体性へと向けられた細心の注意力であり，さらに，この二つの態度が実は一つのものなのだという暗黙の信念であるとするならば，それはまさに野生の思考が，理論的見地からも実際的見地からも，コントがその能力なしとした「継続的関心」に基づくものであるということではないか？

人間が観察し，実験し，分類し，推論するのは，勝手な迷信に刺激されてではない。また偶然の気紛れのせいでもない。

（レヴィ－ストロース，大橋保夫訳『野生の思考』みすず書房）

脱構築 ―デリダ

すなわち，古典的哲学におけるような〔二元的〕対立においては，われわれはなんらかの差し向かいといった平和的共存にかかわりあっているのではなく，ある暴力的な位階序列づけにかかわっているのだ，と。当該の二項のうち一方が他方を（価値論的に，論理的に，等々）支配し，高位を占めているのです。そういう対立を脱構築するとは，まずある一定の時点で，そうした位階序列を転倒させることです。……

そうはいうものの――他方において――この局面のみにとどまっているのは，脱構築される地盤の上で，脱構築されるシステムの内部で，いぜん作業を行なっているということです。それゆえ，ほかならぬあの二重のエクリチュールによって，言いかえれば重層的な，位置のずれた，また位置をずらすようなエクリチュールによって，一方では，高位にあるものを引き下げる逆転，高位にあるものの昇華的……ないし観念化的系譜を脱構築する逆転，他方では，ある新しい「概念」――もはや以前の体制のなかには含みこまれる……ままにならないものの，かつて一度もそうされるままにならなかったものの概念――